

ウニ類天然採苗試験

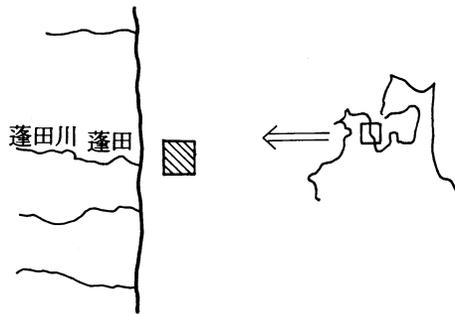
植村 康

昭和59年度において、蓬田村漁協が事業主体となって、当増殖センターと共同で、ウニ類天然採苗試験を実施したので、以下にその概要を記す。

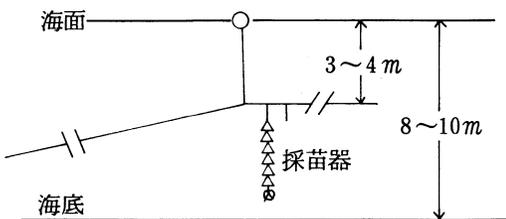
経 過

昭和58年度に、ホタテガイ放流漁場の複合増殖の可能性の検討を行ない、対象種をウニ類、マナマコとしたことは、本事業報告第14号で田中他が報告しているとおりである。昭和59年度は、その一環として、ウニ類天然採苗試験を実施することとなった。ウニ類稚仔が、ホタテガイ垂下養殖のパールネットに付着、生育しているのがホタテガイ稚貝分散時に観察されていることから、採苗器は、昭和59年9月10日及び11月15日に、蓬田村蓬田川沖水深8~10mに設置した。(第1図参照)

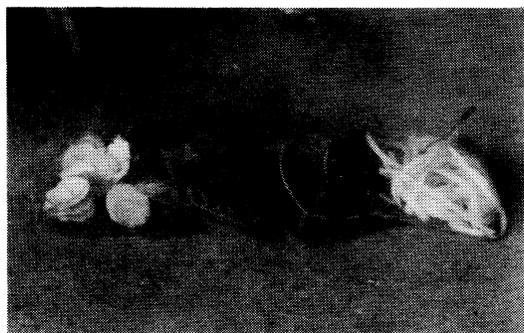
付着基質として、パールネット内に、塩ビ製波板、プラスチック製ひも、破損プラスチック製浮子、ホタテガイ貝殻を入れたものを、一連当り6個結着し採苗器とした。(第2図、第3図参照)



第1図 試験海域図



第2図 ウニ類天然採苗施設の概要



第3図 採苗器

結果及び考察

採苗器の調査は、昭和60年3月12日に行なった。ウニ類の付着はみられなかったが、付着生物は、フジツボ類、コケムシ類、ワレカラ、マガキ、ヨコエビ類が観察され、海藻類の付着はみられなかった。また浮泥が、付着基質の凹部に集積していた。昭和60年5月15日に施設および採苗器を、全て回収観察したが、ウニ類稚仔はやはりみられなかった。以上のように、良い結果が得られなかった原因としては、川村の報告^{1) 2)}にあるように、キタムラサキウニの幼生は、変態後直ちに海底に沈着し、エゾバフンウニ幼生のように、沿岸部に蟻集して沈着する傾向が少ないため、採苗効率が悪くなる点がある。過去、本県における調査でも、付着数が少ないという報告^{3) 4)}があり、量的確保はむずかしいとしている。次に、施設設置場所が、河口に近く、淡水、浮泥の影響を受け易く更に水深が、8～10mと浅いため、施設の安定が良くなかった点等が考えられる。今後は、河川の影響の少ない沖合域で、試験を行う方が良い結果が得られるのではないかと考える。エゾバフンウニの場合、施設の設置場所によって、付着数が大きく変化しているが、キタムラサキウニの場合にもこのような現象があるのかは、不明である。また採苗器の設置時期は、稚仔沈着の2～3ヶ月前として、採苗器表面に、付着硅藻等の生物群集を形成させることが効果的であるとしている。しかしながら、蓬田村地先のような内湾海域における流況環境は、外海域とは異なると考えられ、設置時期については更に検討が必要と思われる。

参 考 文 献

- 1) 川村 一広 (1978) : エゾバフンウニ天然採苗技術の開発1). OCEAN AGE vol. 10. '78-4, 63-68.
- 2) " : " (2). OCEAN AGE vol. 10. '78-5, 65-69.
- 3) 沢田 満・他 (1982) : キタムラサキウニ天然採苗試験. 青水増事業概要, 11, 270-273.
- 4) " (1983) : キタムラサキウニ増殖試験. 青水増事業報告, 12, 268-273.